

書 評

岡田 充博著

『唐代小説「板橋三娘子」考』

——西と東の變驢變馬譚のなかで——

赤 井 益 久

國學院大學

唐代における西方からの文物の傳來およびその影響關係については、石田幹之助『長安の春』（一九三一年）、向達『唐代長安與西域文明』（一九五七年）、エドワード・H・シェーファー『サマルカンドの金の桃』（The Golden Peaches of Samarkand: A Study of Tang Exotics、一九六三年）等の先行研究が知られている。一方、文學については、二〇世紀初頭における敦煌文書の發見により、インド傳來の唱導文學とも言うべき「變文」などの研究に長足の進歩

がある。

唐代文學を詩歌と共に彩る唐代傳奇小説については、これまでいくつかの重要な指摘があった。たとえば、グリム兄弟の物語で知られたシンデレラ譚の最古の物語は、南方熊楠が段成式『西陽雜俎』（續集）にある「葉限」であることをつとに指摘し（『南方熊楠全集』所收「南方隨筆」「西曆九世紀の支那書に載せたるシンデレラ物語」）、「杜子春傳」は『大唐西域記』（卷第七、婆羅痾斯國）所傳「求命池（もしくは烈士池）」傳説に由來することを錢鍾書が指摘し（『管錘編』「杜子春事數見」）、また「枕中記」にはスペインの『ルカノール伯爵』との影響關係を魏建華が考察している。しかし、これらの研究が、唐代傳奇小説における西方からの影響を原則的かつ概括的に示しえたわけではない。

シンデレラ譚は、グリム兄弟の一世紀前にシャルル・ペローが『ペロー童話集』（一六九七年初版）で傳えたサンドリオンが最も知られ、さらにそれに先驅けるイタリアの民話作家ジャンパティスタ・パジローレ（一五七五—一六三二）が口承を採集してまとめた「ペンタメローネ」（五日物語、

イタリア版初版一六三四―一六三六)があり、これが最もまとまったシンデレラ譚と考えられる。文獻的には、南方熊楠が指摘する「葉限」が早いものの、果たして西漸したのか、あるいは東漸したものかは容易には判断できない。

「求命池」傳説にしても、その原話が東漸したものではあるが、中國に流入して以降の類話である「顧玄續」「蕭洞玄」「韋自東」の前後關係にはなお定説を見ない。ルカノール伯爵とパトロニオとの間のやりとりを寓話と箴言によつて構成する『ルカノール伯爵』も、スペインの作家ドン・フワン・マヌエルによつて一四世紀に書かれたものであり、文獻的には大暦年間すなわち八世紀後半に成つたと考えられる「枕中記」を遡るものではない。とはいえ、説話の傳承は文獻における記録が先後關係を決定する唯一の要素であるかといえば、必ずしもそうではない。おそらく、人類の誕生とその擴散の歴史に似て、その流布や傳播を想定し、ある地點、ある時點での記録を比較検討することが説話研究には有意義であると思われる。

従來のこうした方面における類話の収集と話型の分類に

書 評

よる研究方法は、直接的な影響關係を探るほかに、直接的な影響關係を離れた説話のもつ類似性なども視野に入れたつ進展してきた。いわゆるタイプ・インデックスやモチーフ・インデックスが想到された背景にもそうした考えがあつたと思われる。

こうした研究状況にあつて、それを精緻にしてかつ徹底した研究が發表された。岡田充博氏の著『唐代小説「板橋三娘子」考——西と東の變驢變馬譚のなかで——』(二〇一二年二月)である。今後の唐代小説、とりわけ西方傳來の話柄を考察する際の一つの指標となると思われるので、ここに紹介したい。九世紀前半開成年間、薛漁思によつて編まれた『河東記』(『太平廣記』卷二八六、幻術)に所収された、八百字足らずの小説の梗概は概ね以下のようである。後の陳述の都合もあり、まずそのあらすじをプロットごとに區切り、見ておくことにしよう。

唐は汴州の西郊に板橋店がある。店の主人は三娘子という三十ばかりの寡婦。狭い店を客に飲食をひさぐことでや

りくりしているが、裕福な暮らしぶりであった。多くの「驢畜」を養い、公私の車乗が行き來している（A）。往來に難澁している者があれば、これを救済していた。それゆえ旅人はここに寄宿する者が多かった。元和年間、許州の趙季和が洛陽に向かう折りに投宿した。先客が六・七人居り、趙は奥まった所に旅荷を解いた。三娘子は懇ろに旅人をもてなし、客と酒を酌み交わし、痛飲する。酒をたしなまない趙は、話に付き合う。夜が更けると客らは寢に付いた。眠れない趙は、三娘子の隣室から動物の聲がするのを耳にする。のぞき見ると、三娘子は逆さにした器を燈りで照らし、箱から一揃いの鋤鍬を取り出し、六七寸の木でできた牛と人を出し、籠の前に置き、水を含んで吹きかけるとそれらは動き出す。人は牛を驅りベットの邊りを耕作しだす。箱から蕎麥の種を取り出して播くと、瞬く間に芽が出て花が咲き、實った。七・八升の收穫があり、それを臼でひき粉にした（B）。終わると三娘子は木でできた人などを箱に收め、粉で數枚の焼餅をこしらえる（C）。夜が明けると旅人らは出かける用意をする。三娘子はいち

早く起き、客に焼餅を食べさせる。怪しんだ趙は、一足先に辭去し、外から様子を窺う。客らは焼餅を食べきらないうちに、一齊に地に這い蹲い、驢鳴したかと思うと、客らはたちどころに驢馬になった（D）。三娘子は驢馬を店の後ろに驅り立て、旅人の持參品を奪った。趙季和はこれを窺視し、その術をわがものにしようと考えた。ひと月ばかり後、洛陽からの歸り趙は再び板橋店に泊まろうとして、あらかじめ焼餅を作らせて持參し、投宿する。折から他に客はいない。三娘子の歡待は以前にも増して懇ろである。夜、主人は季和に必要なものはないかと尋ねる。趙は明朝に焼餅を所望する。その夜、趙が隣を覗くと前と同じようである。明朝、食卓には他の食べ物と共に焼餅が出される。趙は自分の用意した焼餅を食べ、三娘子を騙して三娘子のものを食べさせ、驢馬にしてしまふ（E）。趙季和は精悍な驢馬に變身した三娘子に跨り、諸國を周遊する。四年後、華岳廟の東五・六里付近で、驢馬を三娘子と見抜いた老人に、三娘子を許してやれと言われる。老人はやおら驢馬の口先邊りに手を當て引き裂くと、三娘子は皮の中から出て

きて(F)、老人に禮を言つて行方をくらます。

煩を厭わず梗概を挙げたのには理由がある。著者の論述が、基本的にこの話柄をどのような型に理解して分類し、どこに類似性を求めるかが極めて重要だからである。また、著者の記述の順も、じつはこのプロットごとの證明から全體を理解しようとしているので、あらかじめ「板橋三娘子」の話の構成要素をどのように把握するかを示しておくことが、讀者にとつても後の論證を理解する上で便利であろうと思う。

いま、試みに前述したプロットを整理してみると、以下のようになるだろう。

- (A) 怪しい宿屋の存在
- (B) 宿屋の女主人が使う魔術(人形に耕作させ、植物を瞬時に栽培する)とその窃視
- (C) 收穫した蕎麥粉で焼餅を作る
- (D) 宿泊客に焼餅を食べさせ驢馬に變える(驢馬への變身)

書評

- (E) 女主人を騙し、逆に驢馬にしてしまう(詐術)
- (F) 驢馬から人間への復身(現形)

類似説話の比較研究を進めるに當たつて、この構成要素の析出が後の世界的な展開を探る上でその基礎になる。著者は、必ずしもそれを先に掲げているわけではない。しかし、結果的には要素ごとに類似説話に言及しているので、著作全體の構成から見えてこれを先に押さえておく必要があるだろう。

とりわけ、「板橋三娘子」の構成要素の中で、(B)(C)(D)が重要であると考えられる。なぜならば、(A)(F)の首尾は、他に見られる説話の場合がそうであるように、説話の骨子に附隨する變容しやすい要素といえるからだ。

著者は、世界的な視野をもつて、類似説話の探求に歩を進める。第一章「原話をめぐつて」において、その視野に入る世界は、ヨーロッパ、西アジア(北アフリカ)、インド、その他(モンゴル・チベット・韓国・日本)に及ぶ。「板橋三娘子」の文藝としての成功とは別に、話柄の傳播を柱に据えたことは、本著作が今後の唐代小説を考察する際の大き

な指標となる。それは、こうした研究方法の可能性を提示し得たこと、わが國に連綿と繼續される昔話（あるいは民間説話）の分厚い蓄積があり、その比較研究を大いに勇気づけていることなどが判然とするからである。

まず著者は、ヨーロッパにおける類似説話として、先行研究によつてつとに指摘されるローマのアプレイウスの小説『メタモルフオーゼイズ』（別名『黄金の驢馬』『金驢篇』、ホメロス『オデュッセイヤ』の魔女キルケなどを跡付けし、魔女による魔術によつて人を動物に變身させる要素はみとめられるものの、豚への變身や他の要素の膨らみから見て、原話とは見なせないと結論する。むしろ、魔術に通じる宿屋の女主人がチーズを與えて駄獸に變身させるローマのアウグステイヌス（三五四―四三〇）『神の國』に傳える話柄に注目する。「不思議な食べ物の製造法、旅人の計略などの要素はここにはない。しかし、宿の女主人が客を騙して妖しげな食物を與え、家畜にしてしまうという點は、「三娘子」とそっくりである。おそらく女神あるいは魔女の古い神話傳説を起源としつつ、それが現實の旅の危険性に引

き寄せられて、このような傳承を生んでいたであろう」（一九頁）とその類似説話の起源を想定しているが、「板橋三娘子」とはまだ距離があるとみなす。ヨーロッパにおける傳承の過程を丹念に追いながら、イタリアのトスカーナ地方に傳わる「ロバになつて働く魔女姉妹」、『ヴォージユ民俗誌』のヴォージユの魔女、クラウストンが傳えるローマの俗話（俗小説の移化）、グリム童話集の「キャベツろば」、ルーマニアの「三人兄弟の王様」を擧げている。いずれも魔女と驢馬への變身のプロットがあるものの、他の要素はないか、もしくは極めて薄い。魔女の姿はむしろヨーロッパにおける女神の形象が色濃く、性愛や戀愛を主軸に展開する話柄群は、三娘子の原話とはみなせないと結論する。

では三娘子の原型は、何處にあるのであろうか。著者は、變驢變馬譚が豊かに傳わる西アジアに注目する。驢馬がアフリカ東北部を原産とする點を踏まえ、『アラビアン・ナイト』に見られる「ホラーサン」のシャフルマーン王の物語」には、プロットの(B)(C)(D)が揃っていることなど

をみとめる。そして、『アラビアン・ナイト』の成書が三娘子に遅れるとはいえ、その話柄自體六世紀頃のササン朝ペルシアに傳わったインド説話に基づくとの説を支持し、三娘子の西漸の可能性を否定する。

古代の説話の供給源となつたのは敘事詩や佛傳佛説、寓話集などが豊富なインドが重きを占めると考へる著者は、人から動物への轉生をインドの「ウパニシャッド哲學」による業による轉生であるとみなし、佛敎説話を介して後世の變身譚とも關係すると考へる。『成實論』『六業品』にある前世の借財のために畜生に轉生し、償いのために勞役に服する話の存在を指摘しつつ、『出曜經』にあるシャバラ草に因む話にいたつて、著者ははじめてこの話柄のプロットを、①旅先に住む魔法使いの女(Bに相當) ②その女が使う人を動物に變える術(Dに相當) ③その術への對處法を教へてくれる援助者(Dの付加要素) ④魔術を解く藥草(Fの付加要素) に分析している(五五頁)。ここで著者は、極めて重要な課題を指摘する。すなわち、類話間の影響關係の有無が、何によつて決定されるかという點である。類

話に共通する基本パターン、つまりプロットの共有がただちに影響關係を示すものではないということだ。

著者はこの點に關して緩やかに括弧にすることどまり、慎重である。著者が、最もふるく確かな來源とみなすのが、カシユミールの詩人ソーマ・デーヴァにより著された、『プリハット・カタール』(六世紀頃の成立?)を改稿した「カタール・サリット・サーガラ」(ムリガン・カタッタ王子の物語)所收)である。著者は、ここで二つ目の課題を提示する。すなわち、骨子と細部、骨格と肉付けに關してである。説話は、傳播の過程でさまざまな要素を取捨選擇し、複雑に變容する可能性を有している。たとえば、當然のことながら時と場所は異なり、文獻上の接受も不明確な場合、何を以て影響の有無を斷ずるかという點である。

それは廣く民間説話の傳播と流布、その影響關係の課題として置き換へることが可能であろう。その課題を考究する際の視點が求められる。著者は、比較對照的には、「カタール・サリット・サーガラ」が最も三娘子に近いと認めつつも、『アラビアン・ナイト』の方が、前者にはない驢馬

にした女主人公に跨り旅をする要素、驢馬に變身した女主人公を助ける援助者の形象化の要素、つまり三娘子の華岳廟の老人に重なる點等、むしろ後者に話柄の展開として近似する部分もあると考える。著者はこの節をまとめるに際して、「ムリガンカタッタ王子の物語」が直接インドから中國にもたらされたわけではなく、西の地に傳わり、アラビアン・ナイトへ流れ込む説話を含む多様な形に變化したことを想定する。その中の一つが中國へと運ばれ、三娘子の直接の原話となったのではなからうか、と結論づけている（六〇頁）。

著者は、この説話の傳承の過程を、できる限りつぶさに追いつめ、その骨格に據りつつ、三娘子の細部にまで目をやりながら、傳播の蓋然性を指摘している。傳播の確證がない以上、對象となる説話の存在を點で示しながら、その錯綜する點を、可能性と蓋然性とで結びつけようとする試みは、極めて説得力を持つように思われる。また、三娘子の個性が那邊にあるかという配慮、すなわち細部における特色や個性を忘れていない點は、説話の大筋を追う折に、

忘れがちになる傾向を戒めている。

ヨーロッパ、西アジア、インドを概観し、インドに源を發するこの變驢譚は、また中國以外の東方へもたらされた。モンゴルに傳わる英雄敘事詩『ゲセル・ハーン物語』（二三世紀以降）チベットの『ケサル王傳』などに一部類似の要素を認めるが、前者はインド・西アジアに傳わる説話が流れ込んだ可能性が大きいことを指摘し、チベットやモンゴルの類話は「キャベツろば」の系譜を引くもので、カタール・サリット・サーガラやアラビアンナイトの系統ではないと結論する。この話の東漸は、インド説話が六世紀以降に佛教とともにチベットに流入してラマ教化し、ラマ教の傳播と共に青海や蒙古地方に及んだとする経路を推定している。

この推定は、作者が説話傳播の過程をいかに考えるかという問いに、一定の假説を讀み取ることができであろう。つまり、こうした説話の傳播には、介入する何らかの役割を想定すべきであって、佛教の弘通、物資の運搬、文物の移入などに付随して説話が運ばれたという、考えてみれば

當然の歸結ではあるが、最も重要な指摘である。すなわち、  
點で現れる説話をいかなる線を以て結びつけるかという、  
線の實際と機能の問題である。結論はこれらを捨象して示  
されるが、三娘子の物語は、ブリハット・カタールが西方に  
流傳して多様に變貌し、アラビアンナイトの源流となり、  
それが中國に傳わり三娘子になったという假説を導く。

\* \* \*

類話の所在とその影響關係を述べる通時的な研究が第一  
章であるとすれば、第二章「物語の成立とその背景」は、  
いわば共時的研究であるといえよう。「板橋三娘子」がい  
つ頃できたものか、同時代の小説に投げ入れてみて、どの  
ような特色を有するのか、を考察する。通時的研究がやや  
もすれば情況證據の蓄積を基礎とする傾向に比して、より  
鋭く作品に即して考察を試みている。編者と思しき薛漁思  
の素性も、書誌學的な編書の過程も不明である。著者は、  
三娘子が所収される『河東記』の成書が、今に傳わる三四  
話中の最も遅い紀年、大和八年（八三四）により、それか

書 評

らさほど經過しない時期であろうとしている。編者である  
薛漁思については王夢鷗氏が『北夢瑣言』に載る「薛澤」  
と同一人物であるとする説を主張する。しかし、晩唐の僖  
宗・後唐の明宗期に活躍した薛澤であれば、『河東記』成  
書の時期と推定する開成初年頃と百年近い隔たりができる。  
著者は、この懸隔をもつて王氏説は成立しにくいと否定す  
る。文藝として小説の認知が遅れ、書誌學的にも小説の扱  
いに搖れがあること等から、小説や小説集の成立過程には  
確證を得にくい。むしろ、著者が述べるように、『郡齋讀  
書志』に傳える「河東記三卷。右薛漁思撰。亦記譎怪事。  
序云、續牛僧孺之書。」を超える情報はなく、むしろこの  
小説集が残そうとした傾向や好尚を考察する方が、無用な  
詮索をするよりは、小説集の實態に近づくことができるこ  
と考える判断は正しい。

著名な『玄怪錄』や『集異記』等の唐代小説集は、完本  
で傳わるものは殆どなく、序文や跋文によって成書の経緯  
を窺うことができぬので斷言することはできないが、必ず  
しもあるテーマに基づく収集ではない。しかし、共通して

看取できるのは、怪異や逸事への關心の強さであり、同時にそれを客觀的にとらえようとする傾向が見えることが、六朝古小説（志怪）との相違である。

『河東記』も他の小説集と同様に、南宋の頃までは單行していたことが陸游『老學庵筆記』の記録によって判明する。著者は、三娘子を生んだ説話の好尚を、『河東記』に所収する他の話を概観することで知ろうとする。その概ねは、鬼・神仙・再生・夢・應驗等に分類される。例えば、「蕭洞玄」は、「杜子春傳」の類話と位置づけることができる作品、前述のようにインドに由來する「救命池」説話の系統である。また、「胡媚兒」は、ガラスの瓶の中に何でも入れてしまう魔術を使う。「葉靜能」は、酒樽を變身させて酒豪の汝南王に饗應する。「申屠澄」は、娶った妻が虎であったという「變虎譚」の一つ。これらはその一部に過ぎないが、こうした魔術・幻術、變身譚への關心や好尚があつたことは、三娘子に通底するものであらうと考える著者の論法は、小説の抱える文藝性から妥當であると言えるであらう。

小説の持つ文藝性とは、直接的な影響關係や規範性が比較的つよい詩歌と異なり、小説は元來その規範が薄弱であり、書誌學的分類上、史傳や諸子との混同の中にあつた。

同時に、それは小説の持つ自由性ともなり、新たな文藝としての發展の可能性をも胚胎するものであつた。したがつて、その研究方法や方式はその限定性をいかに措定し、立論するか大きく依存する。第二章の第二節「板橋三娘子」とその背景」は、作品の精讀による、土地柄、語彙、用法等の考證を主とする。これまでの研究が、いわば外在律であるのに對して内在律の考證である。

ここで著者は、舞臺となる唐代における汴州の土地柄、板橋の立地、旅店という機能、また主要なテーマとなる變驢譚の鍵となる驢馬の歴史のかつ文化史的な位置と役割をつぶさに見る。なぜ旅店が變驢譚の舞臺となり得たかについては、その機能である宿泊施設としての旅館の機能に加えて倉庫業や飲食業を加味したものであつて、そうした店聚落の一つに三娘子の店があつたと認める。また「驛」間を結ぶ「驛驢」が置かれ、中唐以降經濟の進展に伴い、物

資の移動が繁くなり「貸驢業」も繁盛した。したがって、變驢譚の受け皿としての下地が整っていたとみなし、驢馬の中國への移入と共に變驢譚がもたらされたとする舊説を駁し、驢馬がある程度普及した後、すなわち驢馬が日常の風景と化して後に、變驢譚が受け入れられたと考察する。それが二世紀から三世紀、後漢から三國六朝期に当たり、三娘子の原話の上限とも一致する。物資の運搬、文物の移動、その間の實際は、著者の推定するとおり、時間差を考えるべきであり、受容の環境を想定すべきであろう。

原文に關わる著者の知見を知らせる細部を一二擧げることとしよう。三娘子が困窮した來客に對して「往來公私車乘、有不逮者、輒賤其估以濟之。人皆謂之有道」と應對する。この「不逮」は、旅人の路銀不足を言うのではなく、車乘の荷を引かせる役畜の不具合でなければならぬと指摘する。板橋の三娘子の店に驢馬がいる自然な設定となる。また、遅れて投宿する趙季和が「季和後至、最得深處一榻」の「最」を「最も奥まったところ」とする解釋は誤りであり、進歩著しい唐代の言語研究の成果に基づきながら、

「得」を修飾する副詞として「まさに、ちょうど」の意味であると判断している。こう解釋することで、隣室の三娘子が深夜に立てる物音を耳にするのが自然であることが理解できるのである。

三娘子の話で、最も異彩を放ち、讀者を引きつけるのが、三娘子が幻術を使って木製人形を使って蕎麥を栽培する場面であろう。三娘子の細部にして、かつ出色といつて良い部分である。著者は、先行する文獻に類似の例を博搜している。『太平廣記』神仙部「張果」、『論衡』魯班の話、『鄴中記』後趙の石虎の話を擧例し、「三娘子と直接結びつくような人形は、殘念ながら見あたらない。しかし、こうしたからくりの流行が「板橋三娘子」に登場する人形の活躍を、背後から支えていることは確實であろう」（一三〇頁）と指摘する。幻術の受容には、からくりの流行があったとする推論は、一考を要するに思う。評者が思うに、三娘子におけるこの場面は、紙や木が生命を一時的に持ち、それがミニチュアとして生き続け、スモールワールドとして展開し、その收穫を人間の世界が受け取ることに意味が

あるのであつて、操り人形や細工の巧みさにあるわけではない。著者は慎重に言葉を選びながら「人形による人間の耕作と蕎麥の栽培は、外來の魔術の話を下敷きにしてはじめて生まれ得たものではないか」と結論する。後世における翻案から、この幻術の要素が捨象されるのは、この要素が外來のものという指摘は、確たる證據が見つからない中で、説得力を持つ。

以下、三娘子の話の要素を、「種麥」「變驢・黑店」「歸路」「詐術・騎驢」「華岳廟・復身・遁走」等の構成要素にわたつて、關連する事項を類似の例を挙げ、つぶさに述べていく。播種から瞬時に收穫する魔術の類似例を「種瓜」「種棗」「種樹」等を引きながら例證するが、單なる植物一般ではなく、食べ物であること、また魔術によつて栽培された植物にも呪力があることが大事なのであろう。

魔術による「種瓜」「種棗」は、著者が間々言及するように、直接これを三娘子に結びつけることは困難であろう。しかし、斷片的な記述から、そのものを持つ唐代における文化的位相を丹念に辿つていく過程は、婉曲ながら情況證

據を確實に積み重ねていく。蕎麥自體の食文化に占める位置はそう大きいものではない。五代後蜀、何光遠『鑑戒錄』走車駕を引用してのコメント「小麥の焼餅よりも粗末な食物だったのであろう」（二五二頁）は、小麥とまでいかな蕎麥の焼餅は、それを出す旅店の格式を想像させ、驛傳邸店のような規模ではなく、間口三間の木賃宿のような店が舞臺であつたことを示唆し、乗り物も駿馬ではなく、魯鈍な驢馬と化す話の構成と呼應していることに思い至る。

趙季和は、驢馬と化した三娘子に跨り各地を巡る。機を見るに敏で、利にさとい趙の人物像は旅商人を想像させる。著者は、こうした背後に、イラン系ソグド人の交易におけるネットワークを介して三娘子の話も傳播したのであろうと指摘している。

三娘子の話の傳播と展開を考えるに際して、Fの要素である復身と救済は重要である。なぜならば次章の變身譚一般を考えるに本質的な部分を含んでいるからである。華岳廟の老人が驢馬を三娘子とみとめ、趙に許しを請いながら驢馬の口に手を當て引き裂く行爲は、驢馬への變身が、驢

馬の皮を被る底のものであって、深奥部からの變質ではないことである。ここに變驢譚における魔術の質も窺われるのである。

例えば「魚服記」として知られる「薛偉」の變身は、心情の持ち方によって變身の深淺が異なり、淺薄かつ皮相的な變身は文字通り魚の服を身につけることにより變化する。異類への變身は、一方で着脱可能性を含蓄する。變虎譚にあっても、話は同様である。つまり、「變身」と「變形」、「憑依」と「轉病」、即ち著者の言を借りれば「變」と「化」とを、變身譚の文藝としての主題から見ると、三娘子は原話を繼承しつつ、なお素朴な段階にあるといえよう。したがって、著者が指摘する驢馬にされた三娘子が從順であることの不自然さ、まとめ方が強引であるという點も、一概にそうとも言えないのではないか。三娘子の魅力は、この荒削りではあるが力強さや素朴さにあると思われる。

\* \* \*

唐代傳奇小説は、變身譚の寶庫でもある。第三章「中國の變身譚のなかで」は、中國古典籍に見える塗山氏の石、常娥の蟾蜍、女娃の精衛へのそれぞれの變身に觸れつつも、ヨーロッパにおける神と人との間における不可越性・不可侵性が強い傾向に比して、中國における「氣一元論」による融通性や非境界性を指摘する。また、自然との關係を對立とみとめる前者に對して、中國を「同じ氣によって成り立っている以上、植物から動物、動物から動物への變化が起こるのと同様に、動物から人への變化もまた、原理的に起こり得る現象に外ならないことになる。動物から人への變身を自然現象の一つとして認識していった」（一九四頁）とする概括は、中國における變身譚を理解する上での原理として措定できるであろう。

また、中國にあつては漢代以降に整序される思想的な營みにおいて、「氣」にもとづく變化觀は、五行思想の補強を得て、すべての變化・怪異を包み込もうとする。六朝志怪を支える歴史學的精神は、古代以來の巨大な闇を抱える多くの怪異の記録を綴りながら、それを思想的に解釋する

營爲をも、一方では怠らなかつたのである」(二二五頁)との概括も中國文學史における小説のダイナミズムを考へる際の據り所となる。

中國の變身譚は、人から狐・蛇・魚・禽鳥等への變身がみとめられるが、變虎譚が數としては壓倒する。著者は、化虎譚を通して人が獸になるパターンを示す。虎になる變身術の考察が三娘子の考察に役立つと考へるからである。

その原因を、神罰によるもの、罪業によるもの、「轉病」によるもの、凶暴な心性によるもの等を挙げ、變身術として、虎の皮によるもの、生肉を連日食べさせて徐々に虎にしてゆくもの等の例をつぶさに見る。虎皮による變身が古い形をしており、やがて衣服の着脱の新しい形をもつに至ると指摘する。ヨーロッパに流布する「人狼傳説」と化虎譚とを比較することで、その中國における變身譚を闡明しようとしており、その特質を浮かび上がらせることに成功している。

「この衣服重視と虎皮重視の相違には、變身の能動・受動の性格が深く関わっている。自らの意志によつて變身

するヨーロッパの人狼は、衣服(文明)をかなぐり捨てて野生を露わにするのであり、罰によつて變身する中國の場合には、虎皮(野生)に包まれて文明から拉致されるのである」(二二三頁)という指摘は、優れた洞察と中國の變身譚を考へる際の基本的な視點を提供するものである。魔術によつて旅人を驢馬にする變身は、旅人にとっては受動的なものであり、それからの復身もまた受け身にならざるを得ない。三娘子が華岳廟の老人によつて現形するのもその形に入る。

唐代傳奇小説の誕生は、著者が言うおらかな文學精神の發露でもあり、「奇」を求める娛樂精神が小説としての文藝性に大きな刺激を與えたと思われる。この變身による能動と受動の關係は、例えば「人虎傳」(李徵)の自我と世間との軋轢に悩む人物像や、「薛偉」にある變身に向かう自己の意志による選擇等に見ることができ、ここに唐代傳奇の進展を見ることも可能であろう。

中國における變身譚を概観して、著者は變驢變馬譚と三娘子の特質に迫る。大きく四分類する。「應報譚」系、「出

「曜經」系、「千一夜」系、及びその他である。佛教傳來以降、中國の變身譚は輪廻轉生や因果應報の思想と深く結びつき、多くの「畜類償債譚」を生み出した。本書が果たす貢獻の一つは、プロットFに付随する復身の契機となる藥草にまつわる類話を蒐集し、それを新たに體系づけた点にある。その基本となるのが『出曜經』（本縁部）のシャバラ草に因む話である。第四章の日本における受容を見る際も、この點は進展著しい要素として位置づけられる。

三娘子の他に唐代以降直接にその發展を跡づけることができない變驢譚は、原話を薛漁思が中國風に翻案して見せたが、その後唐代の傳奇小説が白話系や文言系の小説に粉本として材を提供したのと異なり、特立している。評者が思うに、いささかユーモラスで素朴だが讀む者を引きつける三娘子の短編が、旅人の金品や生命を狙う黒店や妖術の要素しか現實の中に取り込まれなかった背景には、唐代の開明さや自由さが三娘子には結實したが、現實や日常重視の後世にはその發展を見なかったこと、話柄のもつ展開性の缺如、すなわち「薛偉」における莊子「魚の樂しみ」

（濠水の樂しみ）以來の受け皿の有無、「李徴」における變虎譚の夥しさや「苛政猛於虎」のような共通の親和性が驢馬の話にはなく、中國人の現實重視の傾向が幻術への忌避に働いたのかもしれない。三娘子を軸にその展開を考えることは、單に説話の流れを見るだけではなく、時代相まで浮かび上がらせることになっていることは大いに評價し得る。よい。

第四章「日本における變身譚のなかで」は、日本における古代から近世にかけての變身譚の系譜を探る。驢馬は中國以上に日本においては家畜として普及しなかった。その話柄を介在する重要な要素がないこともあって、直接三娘子を繼承する他は、「旅人馬」の説話群、「出曜經」系の變身の契機に草を食べる話の存在を指摘するだけで十分だろう。この中で、佛教説話から怪異小説へという大きな流れ、つまり中世から近世社會の好尚の推移する際にあつて、著者が指摘する中村某『奇異雜談集』（貞享四年—一六八七、天正年間—一五七三—八一の寫本あり）に三娘子がそのまま取られていることは注意してよいだろう。

なぜならば、日本における展開を考察することは、この話柄自體の中央アジアから中國に至る展開を考える際の參考になるからである。勿論、それぞれの傳播の過程には、それぞれの好尚や下地を異にすることもあつて、獨自の展開を見せる一方、それぞれの要素を勘案し、捨象することで見えてくるものがある。

かくして唐代後期に薛漁思の『河東記』に所收される「板橋三娘子」は、インド説話「プリハット・カタール」を元とする話が「アラビアン・ナイト」へ流れ込み、多様な説話となり、その一つが中國へ傳わり三娘子の直接の原話となったことが理解できる。往時の「奇」を好む風潮により翻案されたが、歐州の魔女に相當する人物像の非親和性馬ほどではない驢馬の家畜としての文化的位相、幻術への忌避などが作用して、その後大きな進展を見ず、素朴ではあるが荒々しいおもしろさを獨自に今日まで傳えている。インドや中央アジアを介して傳播した説話の姿が、著者の丹念にして周到な作業によってようやく現れるのである。

評者は、この書評の中で説話の傳播の過程における立證

の困難さを指摘したが、それは本書が不確定な立論の上に展開していることを言うものではけつしてない。本論五〇〇頁、附論六〇頁、參考文獻六〇頁、索引七〇頁の總計六五〇頁を超える本書のおそらく過半は、立論のための詳細な注であり、その注もただ原典や出所を示すだけではなく、それぞれの文獻解題や立論のための傍證となつており、それだけで優に中國説話の變身譚における書誌解題の役割を果たしている。

進展著しい唐代傳奇小説の研究に大きな一石を投じる本書の刊行は、今後の同じ分野の指標となると同時に、近年わが國の中國學が誇りうる貴重な成果と言えるだろう。

(知泉書館、二〇二二年二月、本文六一五頁、

索引・略年表七七頁)